

114 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(9)
講題：日本思想中的「共生」—佛教、儒教、神道的視座

賴住光子
(2025.11.13)

摘要

本次講演的標題是「日本思想中的『共生』——佛教、儒教、神道的視角」。講師賴住光子教授首先以「問題的所在」為切入點，從「共生」的定義開始，並闡述其在現代的重要性。接著，她以日本具代表性的傳統思想為線索，具體檢討這一概念。

「共生」是重視個體多樣性，並彼此成就的社會形態。然而，自近代以來，在笛卡兒的「我思」所奠基的近代自我之主客二元世界觀中，他者、自然與世界成為由自我控制、操作的對象。在這樣的框架下，人際關係淪為「Give & Take」，亦即以回報為目的，因而無法建立真正意義上的與他者「共生」的關係。

哲學與倫理學者和辻哲郎確立了「人際關係的倫理學」。他否定主客二元論的觀點，對近代自我提出質疑，並倡導將人類置於社會關係中理解的「共生倫理學」。這一思想在今日備受關注，而和辻倫理學的形成，正是受到日本傳統思想的啟發。

I 佛教——以道元為線索

在日本曹洞宗開山祖師道元的思想中，可以看到「共生」理念的體現，尤其是在「四攝法」的實踐中。「四攝法」是菩薩為引導眾生所採取的四種方法，即對他人的施捨（布施）、親切的言語（愛語）、為他人而行的善行（利行）、以及與他人共同實踐（同事）。

這些實踐以「自他一如」為基礎。「自他一如」指的是自我與他者、他物之間相互依存而成立的關係，這與將事物分割看待的「要素還原主義」完全相反。在其主要著作《正法眼藏》中，道元指出：自我是於與他者、他物的關係中成立的，並且自我是在關係中隨時顯現的存在。這些觀點可用「自他不二」的概念來說明。賴住教授由道元思想得出結論：為了『共生』所進行的一切行為，都必須立足於這個『自他不二』的層次，並以成就此層次為目的而實踐。

II 儒教——以伊藤仁齋為線索

江戶時期的儒學者伊藤仁齋批判朱子學中脫離日常、過度重視內在（追求自我內心的純化）的傾向，並強調在眼前的日常人際關係中實踐道德行為的重要性。他主張，對人而言，重要的不是孤立存在，而是在眼前的人際關係（五倫）中生活。

仁齋提出，將「四端之心」（惻隱、羞惡、辭讓、是非）擴展至整個世界，藉由「擴充」（=道德的實踐）來成就「仁」的完成・成德（共生）。賴住教授指

出，在「擴充」的行為中，可以看出與道元所說「成為本來之所是」的循環結構相通。

整個世界是一個不斷生生不息的巨大生命體。仁齋的教導在於讓每個人自覺認識這一點，而這正是「共生」的根據所在。

Ⅲ神道——以和辻哲郎的祭祀論為線索

神道是以日本固有的神祇信仰與祭祀為基礎的民族信仰，但更可以說是一種將「共生」置於核心位置的人與人、乃至人與自然之間的思維與實踐的方式。其特徵在於，不僅重視人與人的關係，更強調自然與人的關係，這是神道思想的顯著特色。

和辻哲郎對神的觀念大致可分為兩類：「祭祀的神」與「被祭祀的神」。後者是將自然的力量與能量神格化，並以不定名的神祇形態顯現於人類面前。在神道中，透過確定這些神的名號並進行祭祀，可以將其背後的無限力量引入共同體，並以賜予人類恩惠的形式加以實現。

神道中的「共生」，正是透過祭祀將外部的根源力量（自然之力）納入共同體而成立。人與人、人與自然的「共生」皆藉由祭祀而得以確保。

在本次講演的最後，賴住教授再次總結各思想中「共生」的基礎及其實踐，並指出，重新審視佛教、儒教、神道等日本傳統思想，可以為超越現代所產生的自他二元對立與要素還原主義的思維提供重要啟示。

關鍵詞：「共生」、和辻哲郎、仏教、儒教、神道

塚本善也 整理

中文翻譯 CHATGPT/陳順益修改

2025.11.13

114 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座

第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(9)

講題：日本思想における「共生」—仏教・儒教・神道の視点から

賴住光子

(2025. 11. 13)

要旨

本講演の表題は「日本思想における『共生』—仏教・儒教・神道の視点から」である。賴住光子講師は最初に「問題の所在」として、「共生」の定義から始

め、現代において「共生」の重要性を述べた。そして日本の代表的な伝統思想をてがかりとして、具体的にこの概念の検討を行った。

「共生」とは個々の多様性を重要視し、互いを成り立たせる社会のあり方である。しかし、近代以降、デカルトの Cogito の近代的自我に基づく主客二元的世界観においては、他者や自然や世界は自己によってコントロール、操作される対象となった。そこでの人間関係は Give&Take、見返りを目的としたものとなり、真の意味での他者との「共生」関係を築くことができない。

哲学・倫理学者和辻哲郎は「間柄の倫理学」を確立した。和辻は主客二元論的見方を否定し、近代的自我への疑義を提示して、人間を社会的関係の中で捉える「共生の倫理学」を唱えた。それは今日注目されているが、和辻の倫理学の形成に示唆を与えたのは日本の伝統思想であった。

I. 仏教—道元をてがかりに

日本曹洞宗の開祖道元において「共生」の思想は、「四摂法」の実践に見ることができる。「四摂法」とは、菩薩が衆生を導くために行う四つの方法、すなわち他者に対する施し（布施）、親愛の言葉（愛語）、他者のためにする行い（利行）、他者と共に行うこと（同事）である。

これらの実践は「自他一如」を基盤に行われる。「自他一如」とは、自己と他者・他物とが相互依存的に成立させている関係のことである。事物をばらばらに見る「要素還元主義」と真逆の考え方である。

主著『正法眼蔵』で道元はこう述べる。自己とは他者・他物との関係の中で成り立つものであり、また自己は関係の中でその時その時あらわれるものである。これらは「自他不二」の概念で説明される。道元の思想から頼住講師はこう述べる。「共生」のためのすべての行為は、この「自他不二」の次元を踏まえ、この次元を成就するために行われるべきである。

II. 儒教—伊藤仁斎をてがかりに

江戸期の儒者伊藤仁斎は、朱子学の日常離脱、内面重視（自己の内面の純粹化）を批判し、眼前の日常的世界の人間関係における道徳的行為を重視した。そして人間にとって重要なことは、孤立することではなく、眼前の人間関係（五倫）の中で生きることであると説く。

仁斎は「四端の心」（惻隱、羞惡、辭讓、是非）を世界全体へと押し広めていくこと＝「拡充」（道徳的实践）による仁の完成・成徳（共生）を唱えた。

頼住講師によると、「拡充」という行為の中には道元の唱えた「本来あるところのものになる」という循環構造を見て取れるという。

世界全体は一大活物として生々し続けている。そのことを個々の人間が自ら自覚するようにするのが仁斎の教えであるが、そこに「共生」の根拠を見出せるという。

Ⅲ．神道—和辻哲郎の祭祀論をてがかりに

神道は日本固有の神々への信仰と祭祀に基づく民族信仰であるが、共同体における人と人、さらには人間世界の背後にある自然と人との「共生」を前面に出した思惟と実践の方法ということができる。特に、人と人との関係だけでなく、自然と人との関係を重視するのが神道的思惟の特徴である。

和辻哲郎の神観念は大きく分けると、「祀る神」と「祀られる神」の二種となる。後者は自然の力、エネルギーを神格化したもので、人間の前には名のわからない不定の神として立ち現われる。神道では、この神の名を確定し、祭祀を行うことで、その背後にある無限の力を、人間に恵みを与えるかたちで共同体に導入した。

神道における「共生」は、外部の根源的な力（自然の力）を祭祀によって共同体に取り組むことで成立する。人と人、人と自然との「共生」は祭祀によって確保されるのである。

本講演の最後に、頼住講師はあらためて各思想の「共生」の基盤とその実践をまとめた。そして仏教、儒教、神道などの日本の伝統思想を見直すことで、現代の様々な問題を生み出す自他二元対立的な要素還元主義的発想を超える示唆が得られると述べた。

キーワード：「共生」、和辻哲郎、仏教、儒教、神道

塚本善也 整理

2025.11.13